NIKKEI Network
ニッケイ・ネットワーク
海外日系人協会だより
2024
NO.59
Jan.

新年のご挨拶
謹んで新春の御祝詞を申し上げます。

2023年は、新型コロナウイルス感染症（Covid-19）のパンデミックがようやく一定の収束を見せ、徐々に海外との往来が復活する中で、さまざまな変化を目の当たりにした1年でありました。海外からの研修員や留学生の来日がコロナ禍以前の状況にまで復活し、当協会が事務局を置くここ横浜にも日ごとに観光客が増え、街に活気が戻って来る様子を喜ぶと共に、当たり前に外出し、人と会い、交流する、そんな日常の有難さを改めて感じた1年ではなかったかと思います。

また、2023年は、日本とペルーの外交関係樹立から150年という節目の年でもありました。ペルーは、日本が南米で最初に外交関係を結んだ国であり、1899年に移民船「佐倉丸」でペルーに渡った移民一世の方々のご努力・ご尽力を改めて思い返し、そこから現在にまでつながるペルー日系社会の発展と日本とのつながりを、大変頼もしく、心強く感じた次第です。また、フィリピンやキューバでも夫々、日本人移住120周年、125周年を迎えた年でもありました。両国の日系社会は、先人の苦難の歴史を思い起こすと同時に、今後の発展のための諸課題について検討する行事を開催して夫々の120周年、125周年を祝われましたが、これも私たちの心に残るものとなりました。

一方で、長引くウクライナやパレスチナの紛争は、世界中で人々を分断し、不安や怒り、悲しみの連鎖を引き起こしています。自然災害による被害も多く聞かれた1年でした。昨年8月にハワイのマウイ島で起きた山火事では、多くの命が失われました。日系の方々が大切にしてこられた寺院なども消失してしまい、これから先、町の復興には長い年月がかかると言われていますが、そうした状況の中で瞬時に広がる支援の輪には、人々の根底にある温かさや優しさを再認識させられました。

当協会では、昨年10月16日～18日の3日間、コロナ禍以来4年ぶりに、国内外の各地よりお客様をお迎えして「第63回海外日系人大会」を、東京にて開催いたしました。コロナ禍での対応で得た知識と経験を活かし、対面開催と同時にオンラインによるライブ配信も行うことにより、大会史上初のハイブリッド開催となった同大会では、若い世代からも多くの参加を得ることができ、さらには日本や日本文化に魅了された「日系でない人々」をも巻き込んだ、新たな時代の「ニッケイ社会」の在り方等について、さまざまな視点から考える機会となりました。

当協会事業の柱であります同大会が、コロナ禍以前とほぼ同様に、17カ国より180名を超える対面参加者をお迎えし、さらに300名を超えるオンライン参加登録を得て盛況のうちに終了することができましたことは、ひとえに日頃よりご支援ご協力をいただいております皆様のお蔭と、心より御礼申し上げます。

本年も、新たな時代に対応しつつ、世界各地のニッケイ・コミュニティと我が国との連携をより一層深めるために、役職員一丸となって努力して参る所存です。引き続き皆様のご支援とご指導をよろしくお願い申し上げます。

令和6（2024）年　元旦
公益財団法人海外日系人協会
理事長　田中　克之

＼海外日系人協会　2023年の取組みを振り返る／

パンデミックを乗り越え、第63回海外日系人大会のハイブリッド開催まで

2019年末に発生し、未曽有の世界的災禍となった新型コロナウイルス感染症（Covid-19）のパンデミック。これにより閉ざされていた海外との往来が完全に復活したのが2023年の4月。2023年は、私たちが「普通の生活」を取り戻した1年だった。当協会では、長く待ち望んでいた日系社会研修員の来日が2022年8月より一部制限付きで再開したことで、それまでオンラインで工夫しながら続けてきた研修やイベント等を、段階的に対面形式に戻して開催してきたが、2023年4月以降はほぼコロナ禍以前の状況にまで復活した。そして、10月には4年ぶりの対面開催となる第63回海外日系人大会を東京で実施し、その様子をライブ配信する初のハイブリッド開催を実現した。今号では、当協会の2023年の取組みを改めて振り返る。

1月

日系社会次世代育成研修（中学生招へいプログラム）
依然オンラインで講座を実施

事務所内の密を避けるため、引続き在宅勤務による出勤調整や時差出勤などの感染対策を継続していたこの時期。北・中南米の日本語学校等で日本語を学ぶ日系の生徒たちを日本に招へいする「日系社会次世代育成研修（中学生招へいプログラム）」も、2020年以降は来日が叶わず「オンライン運動会」や「世界をつなぐ10代のしゃべり場」など、少しでも来日研修のエッセンスが感じられ、日本語学習のモチベーションにつなげられるようなオンラインのプログラムを模索し、実施してきた。

みんなで汗を流したオンライン運動会

2023年1月、オンライン研修の一環として実施した「移住学習プログラム」には、7カ国から約40名の生徒たちが参加。「もしも自分たちが知らない惑星で新しい生活をはじめたらどうなるか」を想像しながら、過去に海外へ移住した日本人がどのような生活を送りどんなふうにコミュニティを作っていったのかなどを学ぶプログラム「宇宙船に乗って」や、同じ日系のバックグラウンドを持ち次世代研修に参加経験のある先輩たちに、研修に参加した当時の思い出やその後の活躍などについて聞くことで、自分自身について考え、自分の強みを見つけるプログラム「ようこそ、先輩」等を実施し、参加した中学生たちはオンライン上で楽しく交流した。

3月

「在日日系人のための生活相談員セミナー」をハイブリッド開催

横浜のライブ会場には約20名が集った

日本でもようやく、屋内・屋外を問わずマスクの着用が個人の判断に委ねられるようになったのが3月13日。依然として水際対策は続いていたものの、春の訪れとともに外出や会食、国内旅行等をする人が増え、開放的な雰囲気が漂い始めていた。

当協会が3月10日に実施した「在日日系人のための生活相談員セミナー」では、横浜の会場に講師と20名ほどの対面参加者を迎え、オンラインも併せて100名ほどが参加してハイブリッド形式での開催を試みた。会場で行われる講義や質疑応答の様子をライブ配信することで、対面開催の良さも感じられつつ、遠方や海外の参加者がオンラインで気軽に参加することができるハイブリッド開催は、参加者の多くから「今後もぜひ続けてほしい」との感想が寄せられた。

4月～6月

研修員・留学生の来日がコロナ禍以前の状況に!

日本では、5月8日より新型コロナウイルス感染症が季節性インフルエンザと同じ「5類」に移行することに伴い、4月29日に水際対策が完全に撤廃された。これにより、日本に入国する渡航者に課されていたワクチン接種証明書や陰性証明書の提出が不要となり、海外との人の往来が本格的に再開することとなった。

当協会では、4月に日系社会リーダー育成事業（JICA）の新規留学生4名、日本財団日系スカラーシップ事業の新規留学生8名が来日したほか、5月には日系社会研修「キューバ日系社会活性化」コース、6月には「和菓子を通じた日系社会活性化」コースなどの研修員が続々と来日。コロナ禍以前の賑わいが復活した。2020年度以降にオンラインのみで実施した研修コースに参加し、来日研修の機会を心待ちにしていた研修員も複数おり、念願叶ってようやく日本に来ることができた喜びを噛みしめていた。

6月18日

「国際日系デー」記念イベント
クイズ!NIKKEI around the WORLDをオンライン開催

6月18日の「海外移住の日」には、6月20日「国際日系デー」の記念イベントとして、オンラインによるクイズショー「クイズ!NIKKEI around the WORLD」を開催した。これは、世界各地の日系社会にまつわるあれこれをクイズにして出題、事前にオンラインで回答を募り、イベント当日はクイズの正解と解説、全問正解者の発表を行うというもの。誰にでも答えられる4択式の簡単な問題から、記述式のマニアックな問題まで全11問を出題したところ、世界各地からたくさんの回答が寄せられた。

留学生2人による司会進行も大好評だった

ペルー、ブラジルとフィリピンからは、クイズの出題や解説の動画を提供いただいた。さらに、JICA横浜 海外移住資料館からライブ中継も行い、日本も含めた世界各地の日系コミュニティの様子を、楽しみながら詳しく知ることのできるクイズショーになった。

6月～7月

日系社会次世代育成研修（中学生招へいプログラム）
4年ぶりの来日研修が復活

1月にはまだオンラインのみによる実施だった日系社会次世代育成研修（中学生招へいプログラム）だが、6月19日に、2023年度の第1陣としてカナダ、メキシコ、ドミニカ共和国、ベネズエラ、コロンビアから日本語学校の生徒21名が来日。通常の中学生13名に加え、コロナ禍で来日の機会がなかった高校生8名も受け入れ、7月12日までの約1カ月間にわたり、講義や視察、日本文化体験、中学校体験入学、ホストファミリーとの交流などを楽しんだ。

来日直後のアイスブレーキング

コロナ禍以来4年ぶりの再開となった来日研修の実施にあたっては、主に感染防止対策等の理由から、中学校体験入学やホームステイ等の期間や内容を一部変更して実施した。それでも、訪問先の中学校やホストファミリーから温かく迎えられ、日本人と交流できたことは、研修員にとって学びの多い体験となった。来日研修ならではの実体験や、他国で同じように日本語を学ぶ仲間たちとの出会いと交流は、これから先の彼らの人生に大きな影響を与えるよい体験となったに違いない。

ホストファミリーとの1日交流

●第63回海外日系人大会　初のハイブリッド開催が実現！●

当協会事業の柱である海外日系人大会は、2020年度にコロナ禍により開催を断念、急遽代替イベントとして「オンラインフォーラム2020 ―コロナの時代を乗り越える世界の日系人」を配信し、その後は、2021年度の第61回大会、2022年度の第62回大会と、2年連続でオンライン大会を実施してきた。そして2023年10月、4年ぶりに東京での対面開催となった第63回大会は、コロナ禍による対応で得た知識と経験を活かし、大会史上初のハイブリッド開催に踏み切った。

秋篠宮皇嗣殿下によるおことば

実際のところ、企画・準備の段階ではどの程度の人数が海外から大会参加のために来日されるのか、おおよその見当もつかない状況の中で諸々の手配を進める必要があった。しかし、蓋を開けてみればほぼコロナ禍前と同規模の、17カ国181名より対面参加の申し込みがあり、建替え工事中により使用できない憲政記念館に代わりメイン会場としたJICA市ヶ谷ビルの国際会議場には、入りきれない程多くの方々にご参集いただく結果となった。一部の方々には、サテライト会場として用意しておいた別室でのモニター視聴をお願いせざるを得なかった場面もあり、ご不便をおかけしてしまった皆さまには大会事務局として改めてお詫びを申し上げたい。同時に、オンラインには国内外の各地より333名もの参加登録をいただき、ライブ配信を視聴いただいた方々からは好意的な感想を数多く寄せていただいた。

今大会では、「飛躍するニッケイ社会へ―期待される新世代のイニシアティブ」を総合テーマとし、特にコロナ禍においてICT 知識とアイデアで日系団体の危機的状況を乗り越えた新しい日系世代や、日本の文化や価値観に関心を持ち日系団体の活動に積極的に参加する日系以外の人々を「新世代」とカテゴライズした。また、日系社会の構成がこのように変化してきていることに注目し、大会テーマの設定にあたっては、これまでのように漢字で「日系社会」と表記するのではなく、カタカナで「ニッケイ社会」と記すことにした。

10月16日

開会式・基調講演・特別講演

開会式での参加国紹介

初日の開会式には秋篠宮皇嗣同妃両殿下のご臨席を賜り、政府代表として岸田文雄内閣総理大臣の祝辞を森屋宏内閣官房副長官に代読していただいた。第59回大会より恒例となっている参加国紹介では、参加者が国ごとに国旗を振ってアピールし、開会式を盛り上げた。

基調講演では、JICA 田中明彦理事長に「日本と日系社会の新たなつながりによる持続的な『共創社会』」のタイトルで、日系の若い世代に対する期待と、彼らが活躍するために多様で重層的なつながりを作ることの重要性について講演していただいた。その後、ブラジル日本文化福祉協会（以下「文協」）の石川レナト会長が「日系社会：連携強化と若い世代の参画」をタイトルに特別講演を行い、若い世代の能力を信じ、機会、自由、責任を与えること、それには先輩世代の知識と経験、支援が欠かせないことなどが語られた。さらにその後、2023年4月より定期的に会議を重ねてきた日本財団の次世代日系人との連携可能性検討事業について、同財団特定事業部の世古将人部長、モデレーターの松本アルベルト氏、6名の検討会メンバーによる報告も行われた。

JICA田中明彦理事長による基調講演

夕刻からは、飯倉公館にて上川陽子外務大臣主催のレセプションが開催された。19年ぶりの女性外務大臣と一緒に記念写真を撮ろうと、参加者たちは次々に大臣の周りに集った。

10月17日

国際シンポジウム・オフィシャルツアー・参加者歓迎交流会

2日目は、冒頭に、2021年に行われた国際日系デー・ロゴコンテストの表彰式を行い、コンテスト主催者（共催）であるパンアメリカン日系人協会のフェルナンド・スエナガ会長と当協会田中克之理事長より、最優秀賞受賞者の伊藤晃満さん（ペルー日系4世）に対し、表彰状と目録の授与を行った。伊藤さんより、考案したロゴの意味やロゴに込めた想い、ロゴ制作を通じてたどり着いた「ニッケイとは何か」に対する自身なりの答えなどが語られると、会場は大きな拍手に包まれた。

国際日系デーロゴマーク表彰式

国際シンポジウムでは、1「期待される新時代のイニシアティブ―ニッケイ社会の新たな挑戦」（モデレーター：アンジェロ・イシ武蔵大学教授）、2「共生社会実現に向けての努力と貢献」（モデレーター：丹野清人東京都立大学教授）、3「コラボレーションの促進」（モデレーター：中井良則常務理事）の3つのテーマでパネルディスカッションを実施。各パネル4名（4組）のパネリストが発表を行い、会場とオンラインからの質疑応答を交えながら討議を行った。従来の大会に比べると若い世代の登壇者が多く、本大会のテーマを象徴するようなプログラムとなった。

質疑応答セッション

新世代の活躍が注目されたパネルディスカッション

オフィシャル・ツアー（熱海視察）

同日には、国際シンポジウムに参加しない方々を対象にしたオフィシャル・ツアーも同時開催し、ツアー参加者は熱海のMOA美術館や起雲閣等を見学。さらに夕刻には、永田町の海運クラブにて、当協会主催の参加者歓迎交流会を行い、当協会国内賛助会員や国会議員、国内関係団体の代表者等との懇談を行った。

参加者歓迎交流会

10月18日

日系人の主張・在日日系人スピーチ・大会宣言発表

日系人の主張

最終日となる3日目は、「日系人の主張」と「在日日系人スピーチ」（こども発表会）を実施。「日系人の主張」には8名が登壇し、居住国における自身の活動やそれに対する想い等を熱く語った。「在日日系人スピーチ」では、静岡県菊川市にある南米系学校「ソヒーゾ・デ・クリアンサ」から、校長先生による学校紹介と、3名の児童生徒による日本語のスピーチを行った。

在日日系人スピーチ

その後、2日目のパネルディスカッションでの討議内容を踏まえて作成し、満場一致で採択された第63回海外日系人大会の大会宣言を、今大会の成果として発表した。また、昼刻には尾辻秀久参議院議長、細田博之衆議院議員（当時）の共催によるレセプションが開催された。

大会宣言の発表

4年ぶりに海外からの参加者を迎えて対面開催する大会であったことに加え、従来とは異なる会場、初めての同時ライブ配信によるハイブリッド開催等、事務局にとっては不安要素の多い大会であった。そのため、参加者のニーズに対応しきれなかった面や、改善についてご指摘をいただく点などもあった。その一方で、対面でもオンラインでも、「よい大会だった」「参加してよかった」「今後も続けてほしい」という嬉しい感想や有難い励ましの声をたくさんいただくことができたことは、事務局スタッフ一同にとって何よりの労いとなった。

同大会の大会宣言は、次頁に全文を掲載する。また、詳細を記録した報告書は、当協会WEBサイト「協会出版物を読む」（メールアドレスの登録要）のページでも公開している。

ライブ配信の様子

ハワイを経由して63回大会に参加！「ブラジル日本架け橋交流プロジェクト」

当協会では、株式会社竹内運輸工業（竹内政司社長）からの指定寄付金により、文協と協力して「ブラジル日本架け橋交流プロジェクト（ブラジル移住者里帰り訪日使節団）」を実施している。同プロジェクトでは、2019年の第60回大会に、文協内・架け橋委員会より2名を招へいして以降、コロナ禍により招へいの実施が見送られてきたが、今回、第63回大会の対面開催に合わせて4年ぶりに招へいプログラムが実現した。

出資者である竹内氏の意向により、招へいメンバーは大会開催前にハワイを訪れ、日本人移民に関連する施設や史跡等を視察し、現地日系団体の幹部メンバーと親しく交流した。同プロジェクトでは2018年に、ハワイにおいて元年者150周年記念式典との合同で開催した第59回海外日系人大会に、ブラジルより若手日系人15名を招へいしている。その際、ハワイのニッケイコミュニティで大切に守られている「ニッケイ・レガシー」に感銘を受けた参加者たちが中心となり、帰国後文協内に架け橋委員会を組織し、ブラジルのニッケイ・レガシーを定義し継承していくための活動を継続していることから、今回の招へいプログラムの行程に再びハワイ訪問を組み入れることとなった。

今回の招へいメンバーは、中島剛エドワルド文協事務局長を団長に、架け橋委員のイジュ・シミズ・ジュニオールさん、タケハナ・パトリシアさんの3名。短い滞在ながら、ハワイでは、ハワイ日本文化センターやマキキ墓地をはじめ、ビショップ・ミュージアム、パンチボウル国立太平洋記念墓地、アリゾナ記念館、ハワイ報知社などを訪問。ハワイ訪問プログラムの実施にあたっては、ハワイ日系人連合協会（UJSH）のキース・サクダ会長をはじめ、同会の幹部メンバーに多大なるご協力をいただいた。

10月14日にホノルルを発ち15日に東京に到着した一行は、翌日より第63回大会に参加。パネルディスカッション1では、文協青年部における活動や、会の活動に関わる非日系の人たちの存在等についてタケハナさんが発表したほか、3日目の「日系人の主張」では、シミズさんが、自身が関わる「日系スカウトグループの活動」についてスピーチを行った。また、ブラジル参加者を代表して中島事務局長が秋篠宮皇嗣同妃両殿下との謁見を行った。

UJSHのみなさんと（左から、シェリー・タムラ元会長、タケハナさん、キャロル・ハヤシノさん、中島事務局長、中島事務局長婦人、ウェンディ・アベ前会長、シミズさん）

＝第63回海外日系人大会　大会宣言＝

新世代のイニシアティブがこれからのニッケイ社会を動かします

2023年10月18日

私たち、第63回海外日系人大会（2023年10月16-18日開催）に世界各地から参集した日系人は、「飛躍するニッケイ社会へ－期待される新世代のイニシアティブ」を総合テーマに討議しました。新型コロナウイルス感染症（COVID-19）のパンデミック以来、4年ぶりに対面で話しあい、またオンライン配信による初のハイブリッド開催で行いました。以下の5項目からなる決議を本大会の成果として宣言いたします。

1.【ICTに通じアイデアに富む新しい日系世代は挑戦を続けます】

パンデミックにより、各国の日系団体は、対面のイベントが行えず、運営資金確保に苦しみました。危機的な状況の中で、活動の維持と拡大に力を尽くしたのは情報通信技術（ICT）に通じアイデアに富む新しい日系世代です。彼らはICT知識とアイデアを活かし、オンラインイベントの開催に取り組み、人々の関心をつなぎとめ、さらに高めることに成功しました。彼らはその知識とアイデアに加え、日系以外の人々も加わるネットワークをフルに活用し新たなイニシアティブ(取り組み)に挑戦し続けます。それには先輩世代の知識と経験、支援が欠かせません。すべての世代が力を合わせ、ニッケイ社会の新たな価値創造に向けて進んでいきます。

2.【日系と日系以外の人々が連携するニッケイ社会は共生・共創のモデルです】

各国の日系社会では近年、日本からの移住者やその子孫である日系人だけでなく、日本の文化や価値観に関心を持ち日系社会の活動に積極的に参加する人々が増えてきました。このような人々も新しい日系世代と呼ぶことができましょう。私たちは日系社会の構成がすでに変化してきていることに注目し、また、日系社会がさらに飛躍するために、日系人に限らず同じ仲間として活躍する場を広げたいと考え、今回の大会テーマ設定にあたり、「日系社会」を漢字ではなく、カタカナで「ニッケイ社会」と記すことにいたしました。

これからのニッケイ社会は、日本の伝統・文化と日系レガシーを次世代に引き継ぐだけではなく、各国のほかのコミュニティと交流し、地域社会に開かれ、貢献する重要な存在となるでしょう。本大会でのさまざまな報告により、多様化する一方で分断される現在の世界において違いを越えて新たな共生と共創のモデルを示すニッケイ社会の取り組みが明らかになりました。持続可能な発展するニッケイ社会を作るために、日系人と日系以外の人々との協力を進め、各国ニッケイ社会との連携をさらに深めます。

3.【初期日本人移住者が残した「教育重視」と「相互扶助」の精神を継承することが大切です】

討議の過程で、日本における共生社会実現の上で今後問題になるのは、「子弟教育」と「高齢者対応」であることが指摘されました。これらの問題は初期移住者がいずれの移住先でも直面した古くて新しい問題です。彼らには「教育重視」「相互扶助」をモットーに問題解決に取り組んできた歴史があります。今日においては、これらの問題への対応は、移住者や日系人の在住国の教育制度や医療・年金制度如何によって異なりますが、初期移住者が残した「教育重視」「相互扶助」の精神を、日本国内を含む各地の日系社会で連綿と継承していくことが大切です。

4.【日本育ちの次世代を応援します】

日本で暮らす日系人の社会はブラジル、米国に次ぎ世界で三番目に大きな日系人コミュニティです。日本で日系人として生まれ、あるいは日本で成長し、日本と親の出身国の両方の言語や文化を身に着けた若い世代がいま、次々に羽ばたいています。本大会ではそのような「日本育ちの次世代」が、アイデンティティを探しながら、葛藤を乗り越え、現在の仕事や活動につなげている経験を共有しました。未知の可能性に挑む日本育ちの次世代を私たちは応援します。多彩なバックグラウンドを持ち、日本の長所と短所を知る若い日系人の活躍は日本社会に欠かせないものとなるでしょう。自治体や企業も彼らの活力に刺激されるでしょう。日本政府が、日本育ちの次世代への理解を深め、柔軟性とスピード感を持って人材育成に取り組むことを求めます。

5.【日系4世ビザの要件緩和と、国籍法の改正を求めます】

ブラジルをはじめとする中南米地域は日系人が一番数多く在住する地域ですが、今後この地域へ戦前あるいは戦後間もない頃のように新規の日本人移住者が赴く時代が再来するとはなかなか考えられません。このため、中南米の日系社会が日本に期待することは、できるだけ多くの日系人が、観光、留学、就労の如何を問わず、複雑な手続き無しに訪日し、日本を知る機会が与えられることにあります。日系3世までについては定住者資格の創設などで大きな前進を見ましたが、日系4世の日本への受け入れについては、厳しい要件が付され、多くの日系4世の来日が叶えられていません。本年6月に明らかになった「日系4世制度見直し案」に対しブラジルの日系5団体は日本政府に更なる4世ビザの要件緩和や撤廃を訴えています。日本に関心を持ち、日本で自己の夢を実現したいと願う4世に、日本の在留資格について一層の配慮を日本政府に求めます。とりわけ、受け入れサポーター制度、年齢制限、家族不帯同、定住化容認要件（滞日年数、日本語レベル）について要件の緩和や撤廃を検討いただくよう求めます。

また、グローバル化した現代社会において、海外で生活する日本人や、海外で生まれ育った子どもが、日本人・日系人としてのアイデンティティを保ちながら世界で活躍するために、在住国と日本の両方の国籍を保持できるよう国籍法を改正することが必要です。国籍喪失規定（国籍法11条）と国籍選択制度（国籍法14～16条）の廃止を検討いただくよう求めます。この措置は共生社会を実現し、日系人の活躍を内外で広げる上でも重要です。

日系社会 Topics

日本・ペルー外交関係樹立150周年 佳子さまがペルーをご訪問

2023年は、日本とペルーの外交関係樹立150周年にあたることから、佳子内親王殿下が11月1日から10日まで初めてペルーを公式訪問された。リマで行われた記念式典へのご出席をはじめ、世界遺産マチュピチュ遺跡のご視察や大統領主催の昼食会等へのご出席のほか、各地で日系人とも交流された。

ご訪問には、当協会の椿秀洋専務理事が首席随員として随行した。佳子さまのペルー公式訪問は、国内外のメディアで大きく報じられ、当協会田中克之理事長も、皇室と日系人との交流の歴史等についてNHKニュースのインタビュー取材に対応した。

フィリピン・ダバオ日本人移民120周年記念式典

ダバオで行われたフィリピン日本人移民120周年記念式典

日本からフィリピンに初めて日本人移民が渡ったのが1903（明治36）年。2023年は、フィリピンのミンダナオ島ダバオに日本人移民が入植して120周年の節目の年となった。11月25日にはダバオで記念式典が開催され、当協会田中理事長もビデオメッセージで祝辞を述べた。

戦前、ダバオには2万人を超える日本人が住み、多くはマニラ麻の栽培で成功し豊かな生活を送っていた。しかし、第二次世界大戦で状況は一変。フィリピンで生まれた2世の多くが日本人の父もしくは両親と離れ離れになり、差別や偏見から身を守るために日系人であることを隠してなんとか生き延びてきた歴史がある。1980年代になってようやく日系団体が組織化されるようになり、ダバオでは日系人会が日本語学校や国際大学を創立し活動している。

戦争によってフィリピンに取り残された残留日本人の身元確認と国籍回復は、90年代になって日本の民間ボランティア等が協力して行われるようになったが、現在残留2世の多くは高齢化しており対策が急がれている。

CIATEコラボラドーレス会議2023を開催

当協会では、厚生労働省からの委託によりブラジル・サンパウロにある国外就労者情報援護センター（CIATE）に専門嘱託を派遣し、日本で就労したいと希望する日系人等に対し必要な情報提供を行っている。CIATEが12月2日～3日にサンパウロで開催したコラボラドーレス公開研修セミナー（コラボラドーレス会議）に、当協会田中理事長および東京都立大学の丹野清人教授（当協会評議員）が参加した。

第63回海外日系人大会について報告する田中理事長

コラボラドーレスとは、ブラジルに帰国した、日本で就労経験を有し地方で活動するCIATEの協力者（コラボラドール　※複数形はコラボラドーレス）のこと。今回の会議では「在日ブラジル人の職業訓練及び能力開発」をテーマに、厚労省外国人雇用対策課の熊田知俊課長補佐が日本国内の状況や政策等について説明したほか、日本での就労経験者による体験談や、CIATE日本語教室で学ぶ生徒等からの発表等も行われた。

初日の開会式で挨拶した当協会田中理事長は、10月に開催した第63回海外日系人大会を振り返り、同大会で次世代ニッケイ人の活躍や、四世ビザに関する課題、国籍法の改正等について討議され大会宣言として発表した事等を報告した。また、2日目に基調講演を行った丹野氏は、日本で暮らす外国につながる子どもたちの教育と就職について、その現状と課題等を報告し提言を行った。会議の様子は後日YouTubeで公開予定とのこと。

NIKKEI Network NO.59 海外日系人協会だより 2024 Jan.
発行／（公財）海外日系人協会　〒231-0001　神奈川県横浜市中区新港2-3-1JICA横浜2F
TEL:045-211-1780　FAX:045-211-1781
E-mail:info@jadesas.or.jp　URL:www.jadesas.or.jp　編集発行人／椿 秀洋

日本での生活をもっと安心に!
Health and Life Insurance for foreigners in Japan
短期滞在・日本在住・企業就労の外国人向け医療・生命保険
オススメ
短期滞在・在住者向け保険
VIVA MED-S・VIVA MED-30
(Life and Health coverage)
・短期滞在は医療保障最大100%のVIVA MED-S
・在住には医療保障30%のVIVA MED-30がそれぞれオススメです。
外国人社員・スタッフ向け保険
VIVAライト・VIVAガード
(Life and Health coverage)
・年間保険料12,000円（1ヶ月あたり1,000円）からと手頃な価格で用意。
・外国人スタッフの福利厚生の一環としてオススメです。
その他ビザに応じた各種保険を用意!

VIVA VIDA!®
セブン銀行グループ
少額短期保険会社
㈱ビバビーダメディカルライフ
VIVAVIDA MEDICAL LIFE CO.,LTD
関東財務局長（少額短期保険）第51号
For more information, call:
TOLL FREE: 0120-656-684
TEL: 046-265-6685
Visit www.vivavida.net